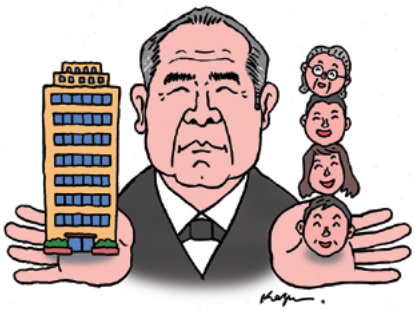
談論風発
INTERVIEW

楢原 誠慈
NARAHARA Seiji

東洋紡
会長



「順理則裕」の精神と国土・広域基盤づくり

このたび関経連の国土・広域基盤委員長を拝命いたしました。弊社は、約140年前に創業した綿紡績に始まり、現在はフィルムや樹脂、バイオなど幅広く化学製品を手掛けていますが、事業の基本は一貫して「モノづくり」です。そういう意味では、委員会が担当する「国土づくり」については門外漢になります。しかし、弊社の企業理念「順理則裕」の精神にのっとり、皆さまのお力を借りながら、関西ひいては国の発展に、わずかでも貢献できればと考えています。

「順理則裕（じゅんりそくゆう）」―― これは、NHKの大河ドラマ『青天を衝け』の主人公、そして新1万円札の顔としても話題となっている渋沢栄一翁が、座右の銘の一つとして大切にし、今からちょうど100年前の1921年に弊社のために揮毫した言葉です。

社内では「なすべきことをなし、ゆたかにする」と解しています。「順理」とは、「なすべからざることをしない」ことはもちろん、積極的に「なすべきことをなす」ことを指します。弊社にとって「なすべきこと」とは、世の中の課題解決に貢献することです。「則裕」は、一般的には「ゆたかになる」と解釈されますが、われわれは渋沢翁のエネルギッシュな足跡から真意を考え、受動的に「ゆたかになる」のではなく、私たちが意志をもって「ゆたかにする」と解しています。では、何をゆたかにするのかというと、社会です。『青天を衝け』の中で、まだ子どもの翁に母上が「みんながうれしいのが一番」と語るシーンがありましたが、まさにこれが翁の原点の一つであると思います。社会をゆたかにすることによって得られるまっとうな対価をもって、自らの事業も成長させる。これが翁の言われた「論語と算盤」の意味であると考えています。

渋沢翁は、これら「順理則裕」や「論語と算盤」といった理念のもと、経済や生活に不可欠な銀行、保険、ガス、倉庫、製紙、紡績など次々と事業を興しました。加えて力を注いだのが鉄道事業です。翁が設立に関与した会社は500社以上にのぼるといわれますが、その中には現在の東急電鉄や京阪電気鉄道をはじめ、東日本旅客鉄道（JR東日本）の東北本線を建設した日本鉄道など、多くの鉄道会社が含まれています。

当時は自動車も飛行機も普及しておらず、都市の間や郊外との移動・輸送の手段は徒歩か荷車か船でしたので、鉄道網の整備こそ当時の「国土づくり」の要であったといえます。翁の願いでもあった「経済活動を活発にし、災害に強く、新たな変化に対応できる、そしてだれも取り残さない」、委員会の活動を通じて、そんな国土づくりのお役に立つことができれば幸いです。

国土づくりという視点で関西を見てみますと、京都、大阪、神戸など核となる諸都市が、ゆたかな自然や歴史的遺産のなかに適度な距離をおいて位置し、その間や周りの街々が鉄道や道路で相互に密接につながっており、とてもよくできていると感じます。

私は九州の生まれで、関西のことはよく知りませんでしたが、社会人になり九州の企業に就職して関西企業の方と会った折、「京都も大阪も神戸もそれ以外の街にも、それぞれに独自の文化や産業があり、皆自分の街に誇りを持っている」と教えていただきました。今でこそ、多様性やダイバーシティの重要性は皆が認めるところですが、当時はとても新鮮に感じ、転職するなら関西の企業だとひそかに思ったものでした。

そして縁あって東洋紡に転じ、本当に関西に来ることができて30余年、関西の皆さまに大変お世話になりました。これからは少しでも関西に恩返しをしていければと思っています。（談）